

2024 年度

iTL 先端的プロジェクト奨学金 最終報告書

輪島朝市と祖母の絵～人々の思いと記憶～

中央大学 国際情報学部 国際情報学科 3 年

山口莉音

学籍番号:22G1117003F

目次

1. 研究趣旨

2. 能登半島地震・輪島朝市の概要

3. 背景

4. 取材概要

4.1. 出張輪島朝市関係者（働く方々、企画などの運営に関わる方）

4.2. 祖母

4.3. 出張輪島朝市@金石

4.4. 祖母の絵のモデルとなった方々の調査

4.5. 祖母の新しい作品鑑賞

4.6. 祖母のモデル(浜谷順子さん)

4.7. 被災後の輪島

4.8. 浜谷順子さんからの手紙

5. まとめ

1. 研究趣旨

私の祖母は、長い間、輪島朝市に通って、そこで働く人たちの姿を絵に描いてきた。しかし、2024年1月1日に起きた能登半島地震、朝市通りでの火災の影響で、輪島朝市は存続が脅かされる状況となった。。同朝市関係者は、どのような体験をし、どのように立ち直り、どのように復興を目指しているのか。地震、大火事、追い打ちをかけるような豪雨という大惨事に遭った人たちの過去、現在、未来について、インタビューを通して記録し、ルポルタージュ作品としてまとめることが最終目標である。

本研究の目的を整理すると、①被災から復興へ向かう輪島朝市関係者の体験と想いを明らかにすること、②特に、祖母の絵のモデルになった方々が、被災をどう体験し、どういうプロセスを経て復興へ向けて動き出しているのか、その原動力は何かを明らかにすることである。

被災地から遠く離れた場所に住む大学生としての視点を大事にし、自らの思いや気づきも記録する。それによって、本研究が、私と同様に直接的に体験していない人々にとって、被災を考えるきっかけとなってほしいという願いを込めて、研究を進めていきたい。

災害が起きてから日が浅く、復興に向かう途中段階の地域で取材を行っている点を考慮し研究を進めていきたい。取材方法や日程についても現地の方と連絡し、確認を取った上で慎重に実施していく。

・研究スケジュール

2024年5月2日(木) 石川県金沢市 金石港にて出張輪島朝市出店者へのインタビュー

2024年5月3日(金) 内灘町にて祖母へのインタビュー

2024年5月4日(土) 金石港にて開催の「出張輪島朝市@金石」に祖母と同行

2024年9月29日(日) 東京都美術館(東京都台東区上野公園)にて開催の「第八十五回 記念 一水会展」で祖母の絵を鑑賞

2024年11月16日(土) 石川県輪島市 ワイプラザにてインタビュー、朝市通りの訪問

第1回取材 2024 年5月2日～2024 年5月4日 石川県金沢市

日時	行程
2024年5月2日(木)	8:15 金沢駅 到着 9:00 金石港 到着 加工場にてインタビュー 12:00 昼食 加工場2階事務所にて働く 方々の昼休憩に同席 13:00 インタビュー終了 14:00 宿泊先にチェックイン 宿泊先:金沢マンテンホテル 駅前
2024年5月3日(金)	11:00 祖母宅 到着 インタビュー実施 15:00 内灘町の見学 (液状化、陥没した道路を見学) 17:00 祖母宅にて翌日の「出張輪島 朝市@金石」出店者を確認 18:00 解散
2024年5月4日(土)	9:00

	金石港に到着 祖母とともに「出張輪島朝市 @金石」を見学 12:00 解散 13:00 金沢駅 出発 15:55 東京駅 到着
--	---

第2回取材 2024 年11月16日 石川県輪島市

日時	行程
2024年11月16日(土)	8:45 金沢駅 到着 11:20 輪島市 到着 12:00 ワイプラザ輪島 到着 浜谷さんにお話を伺う 12:30 朝市通りを含む市内を見学 15:00 輪島市 出発 17:50 金沢駅 到着

2. 能登半島地震・輪島朝市の概要

・令和 6 年能登半島地震¹の概要(2024年1月28日現在)

発生日時 : 2024年1月1日 16:06

震源 : 石川県能登地方

規模 : マグニチュード 7.6

震度 : 志賀町・輪島市で最大震度7を観測

石川県死者数 : 508名、うち災害関連死※280名

輪島市死者数 : 189名

※災害関連死とは²、災害による負傷の悪化や避難生活で生じる身体的負担による疾病でなくなることを指す。地震や津波などの直接的・物理的な原因による死亡でなく、避難生活による肉体的負担精神的な負担による死亡である。被災の精神的ショックによる自殺についても災害関連死が認められたケースがある。県の審議会ですら市区町村における認定基準や審査会を経て認定されることで災害弔慰金の支給対象となる。東日本大震災後の災害関連死としては最も多くなっている。

・輪島朝市の概要

輪島朝市は1200年の歴史を誇る朝市である。鮮魚・干物などの海産物、農産物、工芸品まで幅広い商品が並ぶ輪島朝市は全長350m。出店者は朝市通りに住み店と露店を出していた人もいれば、自宅は別にあり商店の軒先を借りて露店を出していた人まで様々である。地震が起きた2024年1月1日は定休日だった影響で多くの出店者が自宅にいて地震と津波から避難できた。³

¹ 内閣府. 令和 6 年能登半島地震に係る被害状況等について (令和 7 年 1 月 2 8 日 1 4 時 0 0 分現在). https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/r60101notojishin/pdf/r60101notojishin_55.pdf. (最終閲覧 2024.2.12)

² 内閣府政策統括官 (防災担当). 災害関連死について. <https://www.bousai.go.jp/taisaku/kyuujo/pdf/r01kaigi/siryo8.pdf>. (最終閲覧 2024.2.12)

³ 輪島朝市. 輪島市朝市組合の現状について. <https://asaichi.info/2024/01/29/%e8%bc%aa%e5%b3%b6%e5%b8%82%e6%9c%9d%e5%b8%82%e7%b5%84%e5%90%88%e3%81%ae%e7%8f%be%e7%8a%b6%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6/>. (最終閲覧 2024.2.12)

地震に伴い発生した朝市通りでの火災の被害は以下の通り⁴である。

覚知日時：2024年1月1日17:23

鎮圧日時：2024年1月2日7:30

沈火日時：2024年1月6日17:10

焼損棟数：約240棟

焼失面積：約49,000 m²

被害が拡大した原因として消防活動が困難だった原因：

- ・火災区域横の河川(河原田川)で水位が下がり、水が確保できなかった
- ・大津波警報により海岸から海水の確保ができなかった
- ・建物の倒壊などで使用が不可能になった防火水槽があった
(9か所中4か所が使用不可、使用不可の防火水槽は細い道沿いが多い)
- ・街区内の住宅が倒壊し侵入できない状況であった
- ・街区外周から放水するも中央部にまで届かなかった

・出張輪島朝市

インタビュー実施の二木洋子さんが代表を務める「輪島朝市を応援する会」が中心に開催している出張型の朝市。第1回は2024年3月23日に金石港で開催され、4ヶ月弱ぶりの開催にのべ13000人ほどの人が足を運んだ。当研究で訪れた2024年5月4日に開催された第2回の朝市の他にも石川県内外で開催されるイベントにも数多く出展し、2024年7月10日にはワイプラザ輪島店での開催で被災後初めて輪島での開催がなかった。

3. 背景

私がこの研究を行おうと思ったきっかけは、父方の祖母の存在である。祖母は20年近く前から輪島朝市で働く方々の絵を描いていた。

⁴ 総務省消防庁消防研究センター．令和6年能登半島地震において発生した輪島市大規模火災における消防庁長官の火災原因調査 <3月18日時点>．https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/post-148/01/shiryou2.pdf．（最終閲覧 2024.2.12）



祖母の過去作品

私自身、輪島を訪れたことがなかったのだが、祖母がずっと絵を描いていたことで“輪島朝市”というものに親しみを感じていた。祖母が毎年自作のカレンダーを送ってくれて、日常の中に輪島朝市の絵があったことも親しみを感じている理由のひとつである。



祖母から送られてくる自作のカレンダー

祖母の絵をきっかけに、2024年1月1日に起きた能登半島地震並びに火災の被害を受けた輪島に注目するようになった。東日本大震災以降、どの災害のニュースを見ても、以前の姿より被災後の姿の方が強く印象に残っている。そこに住む人々に対しても、以前の暮らしについて思いめぐらすわけでもなく、ただ被災者として見てしまっていたように感じる。しかし、能登半島の地震、輪島の火災については他の災害報道を目にしたときとは違った。祖母の絵で人々の以前の姿を知っていたからこそ、輪島が被災地と報道され、絵の中にいた人々が被災者と呼ばれるようになったことに違和感を覚えた。昨日までは被災地でも、被災者でもなか

った場所や人を思い浮かべ、起こったことの大きさと災害がもたらす被害の惨さを実感し、他人事として捉えることはできなかった。私たちとなんら変わりのない生活を送っていた人々の日常が一瞬でなくなってしまったという事実を強く実感させられた。ニュースなどで見る被災後の輪島に祖母が描いていたその面影はなかった。火災により朝市の開催が困難となった現場を見て、祖母は何を感じているのだろう。そもそもなぜ輪島にこだわり絵をかきに行っていたのかが気になった。そして、祖母を魅了した絵のモデルの方々はどうな思っているのだろう、輪島朝市はどうなってゆくのだろうと、今までに見た災害の報道を目にしたときには抱かなかった考えが駆け巡った。

2024 年 3 月 23 日、祖母から「出張朝市に行ってきた」という連絡をうけた。そこで私ははじめて「出張輪島朝市」の存在を知った。出張輪島朝市とはその名の通り、輪島朝市で働いていた方々が出張形式で朝市の食と文化を届けている活動である。祖母は複数の知り合いの方と地震・火災以来は初めて会えたという。輪島での開催ができなくなった朝市も、形態を変えて存続させようと復興の第一歩を踏み出しているという状況を知り、再び祖母の絵が思い浮かんだ。モデルの方々はどうな思っているのだろうか、出張朝市に参加しているのだろうか、輪島朝市が再び動き出した今、直接聞いてみたいと思うようになった。

それと同時に、頻繁には帰省できずにいる私は、祖母を知ろうと質問をする機会は数少なかった。何を思って祖母は輪島に通い、絵を描いていたのだろう。それまで自分の中では当たり前前の存在になっていた絵について、込められた祖母の思いが知りたくなった。

そこで、輪島朝市の方々の思いと、祖母の思いを明らかにし、ルポルタージュとしてまとめるべく企画を計画し研究を実施することにした。

4. 取材概要

4.1 出張輪島朝市関係者

2024 年 5 月 4 日に開催される「出張輪島朝市@金石」に向けて取材準備を行った。出張輪島朝市公式 Instagram との DM で担当社の方と連絡をとり、開催前々日の 5 月 2 日に金石港の加工場にて働く方々へのインタビューを実施させていただくことになった。事前の連絡段階で「今回が大きな売上のチャンスの機会で、必死に色々やっているのに邪魔になることだけはやめていただきたい」とのメッセージを受け取った。輪島朝市を絶やさぬよう活動を続ける人々の出張朝市にかかる思いが伝わってきた。失礼がないよう細心の注意を払い取材を実行することとした。

金沢駅からバスに乗り 20 分ほどで金石港に着くと、「がんばろう！輪島朝市」と書か

れたオレンジの旗が目についた。着々と 4 日に開催される出張朝市の準備が進められていた。



出張輪島朝市が開催された金石港の会場

出張輪島朝市の開催経緯について、活動の全体をとりまとめている橋本三奈子さんにお話を伺った。



加工場 2 階の事務所で作業を行う橋本三奈子さん

橋本さんは東京から石川県輪島市河合町にある朝市通りに移住し飲食業を営んでいる。地震が起きた 2024 年 1 月 1 日には 3 年ぶりに東京に帰省したそう。輪島朝市の方々とグループチャットを作り、情報が点在している状況の中でガソリンスタンドの情報や ATM の稼働情報を流していたという。そんな橋本さんは、自分が生き残ったのはなにかのお役目だと感じたという。

出張輪島朝市の立ち上げ経緯を伺うと、次のように語ってくれた。

「朝市のみなさんがコロナやインフルにかかったとか衛生環境の悪いところで暮らしているのを聞き二次避難しなよ、と背中を押そうとしたときに、何も仕事がないのに行ってどうするという感じでした。じゃあ金沢で仕事があるといいねということで、金沢で魚の加工ができる場所を探しました。」

金沢に住む顧問弁護士の協力もあり、金石港で場所を借りることになったという。

「魚をさばける場所、干物が作れる場所ができるということで、そこから輪島朝市をやることになりました。」

そして、“出張輪島朝市”という名前を付けるまでの経緯について次のように語ってくれた。

「そもそも輪島朝市組合という任意団体があるのですが、そこが事務所も被災して名簿もなくなり、組長も被災してしまったから機能が停止してしまいました。総会もできないし、それなら動ける人だけで動こうと、皆さんの意見も聞くことができない状況で有志が集まってやることになりました。今までにも朝市の人がデパートで「輪島朝市」というのぼりを掲げて物を売るということをしていました。同じような活動のひとつとすれば有志だけで活動しても問題ないだろうことで、出張輪島朝市というネーミングにして活動をおこなうことにしました。」

メディアで取り上げられたことで、出張朝市の存在を知った方から出店したいとの申し出もあり最終的には29ブース、40名が参加する「出張輪島朝市@金石」の開催に至ったという経緯を知ることができた。

橋本さんに活動の目標についても伺った。

「最後は輪島に戻るっていう目標があるんだけど、輪島朝市はやっぱり魚が特徴。いろいろな種類の魚が安く大量に揚がっていたのは輪島港があって、漁師さんがいてっていうことで(成り立っていた)。今そこがなかなか動けていないので、どっかの屋根の下や路上で朝市をやっているという事は簡単にできるかもしれないけど、本当の意味で輪島朝市に戻るためには港や漁師さんが戻らないとだめだと思っています。時間がかかることは覚悟しないといけないと思うので、それまでの間はとにかく輪島朝市の^ひ灯を消さないように、活動を継続して名前を皆さんにずっと覚えておいてもらえるように、いろいろなところに出張して、外に出て、その間に全国の皆さんにお会いして、ファンを作って、それで輪島に帰りたいなと思っています。」

港や漁業が戻らない限り「本当の輪島朝市」にはならないという点に、輪島朝市がいかに地域と結びついたものだったかを再確認させられた。地震と火災により一瞬で失われた物やことの大きさを改めて感じた。そして輪島朝市の灯を消さないために、名を全国に広めようと活動しているという出張輪島朝市が開催されることの意義を知ることが

できた。

会場横の加工場では9名の方々が干物の加工作業を行っていた。作業中の方々に声を掛け、インタビューをするということは簡単ではなかった。だが、逆に皆さんが声を掛けてくださりインタビューをはじめることができた。

出張朝市の代表である二木洋子さんは出張開催の朝市について次のように教えてくれた。

「この作業場が完成したのが3月6日なんです。私たちは6日からこの加工場作業をするようになって、3月13日に第1回(出張輪島朝市)を開催して、そのときにたくさんの方が来てくれてね。本当にびっくりした。嬉しかった。あんなに長い間休んでいたのに地元の人も、県外からの人も来てくれて。お得意さんが尋ねてきてくれて、安否確認ができた。」

そして、出張開催ならではの新たな難しさについても話してくれた。

「今回(5月4日)で1回金石さんは終わりで、これからは県外にも販売に行く予定。県外となるとたくさん持って行けないし、生ものだから冷凍車を手配しないといけなくて、準備は大変だと思う。朝市の場合は毎日テントを貼って、終わればテントを片すだけだったからね。でも、対面販売で営業できるってことは本当に楽しいよ。」

そして、代表としての願いは朝市を守っていくことだと語ってくれた。



出張輪島朝市代表の二木洋子さん

話を聞いていくと、ほとんどの方が親世代の跡継ぎで現在も朝市の仕事をしていることが分かった。1200年の歴史をもつ輪島朝市では各々の店が代々受け継がれ、店ごとに鮮魚、干物など扱う品物も違う個人事業主としての経営で言い換えればライバルだったそうだ。ご主人が漁師で売れ残った魚を自分で干物にして売るため原価がゼロの物で

商売を行うケースが多く、本来は売上が立つものだという。各々がそれぞれのペースで、6時から12時ほどまで朝市に出て、明日売る分の魚だけを加工するという作業形態から一転、現在はアルバイトという形式で決まった時間に加工場に集まり、出張朝市に向け大量の魚の加工を分担してみんなで行っていた。鮮魚を主に扱っていた方は干物の加工という新しい業務に取り組むことになるが、以前から干物を扱っていた方も店ごとに味付けなどは違うため全く同じ作業を行っている人はいないということになる。なによりも、個々でやっていた作業をみんなで集まって行うということが働く皆さんにとっての一番大きな違いであるようだった。

作業について聞くと、「みんなと作業できて楽しい」「ワンチームで頑張れる」と明るい言葉が返ってきた。作業も和気あいあいとコミュニケーションを取りながら行い、笑顔が溢れていたのが印象的で、私も元気をもらうことができた。

小坂美恵子さんは次のように語ってくれた。

「輪島へ帰ってももう家がだめだから。しばらく頑張っていけるところまで行きます。仕事をしていてもやっぱり輪島が心配。でも気持ちは前に進んでいる。ここでみんなと作業をしていると嫌なことも忘れるし。」

実際、輪島から金石の加工場までは車で2時間ほどかかるそう。長時間の運転や金沢という慣れない場所を車で移動することの怖さから容易に輪島へは帰れないという。



小坂美恵子さん

小坂さんは作業の手を止めることなく、続けて次のように話してくれた。

「みんな散々泣いたんだわ。ずっと泣いていた。でも、今は楽しく、ここにいるときは楽しく。漫才よりも面白いしね」

「でも家に帰ればまた心配してしまう。でも、いつまでもくよくよしていても仕方ない。前に進まないと病気になってしまう。」

明るく強い決心を語ってくれた小坂さんの話から、輪島朝市を絶やさないためという大きな意義に加え、働く人々の心の支えとなっているという出張輪島朝市の新たな意義を見いだすことができた。出張朝市の活動が輪島朝市としての復興を進めるとともに、働く個々の心の復興にも大きく寄与している、私はそのように感じた。

二木千鶴子さんは出張朝市への参加までの経緯を次のように語ってくれた。

「最初は金沢に出てきてほかの仕事をしようかなとも思ったんです。でも(出張朝市に)誘ってもらって、できるかなと不安だったんだけど、家に一人でいるよりもいいんじゃないかという子供たちの後押しもあって参加することにしました。」

「やりがいもあるし、今までに経験したことないようなイベントに出ることができるし、いろんな人に会える。」

「同じ朝市でも店が離れていてそんなに喋らなかった人たちとも仲良くなれて、来て良かったです。」

そして、笑顔で今後について次のように話してくれた。

「みんなと仲良く、楽しく仕事したいし、ここ(金石)だけじゃなくて他のところにもどんどん出て、輪島朝市が全国にまだまだ知られるように、忘れられないように頑張りたいと思います。」

「若い人たちが輪島に戻って、復旧が進めば輪島もまた良くなるかな。(若い人たちに)それを支えて行ってもらいたいなと思います。」

輪島朝市で繋がれた新たな出会い、そして働く人々の仲の良さが二木さんを惹きつけ、来て良かったと思わせている点に輪島朝市のひとつの魅力であるお母さんたちの明るさと暖かさを改めて感じた。



二木千鶴子さん

インタビューの中で、出張朝市に参加するまでに不安を感じていたという人は二木千鶴子さんだけではなかった。「ふるさとかから離れて仕事をすることは不安だったけど、朝市に出ていたときの仲間がいたから頑張ろうと思えた」そんな声もあった。。不安な気持ちがありつつも、今まで何年も続けてきた魚の仕事はやはり楽しいと語ってくれた。この仕事生きがい、楽しいと語る皆さんの表情が輝いていた。

取材の中で最も私の記憶に残ったのは、池端麗子さんとの会話であった。

「輪島へ行ってみた？ 輪島すごいんだわ。行ってみたら分かるよ。」

池端さんは続けて、「どこの大学なの？ 東京？」と私に尋ねた。そうです、と答えると先ほどまでは作業先に向けていた目線を私に向け「幸せだよ。」微笑みながら私にそう言った。



池端麗子さん

その一言、その笑顔に様々なことを考えさせられた。何が幸せなことなのか、池端さんが地震や火災を通して見た景色や、被害については踏み入って聞くことができなかった。しかし、私は自分自身に当たり前と呼べる日常があり、帰るふるさがあるということがどれ程恵まれたことであるのかを改めて感じた。そしてその恵まれた状況が続いていくことに絶対はないということを同時に考えた。

皆さんがお昼休憩となり、私もインタビューを終えようとしていたところ、「みんなで食べた方がおいしいんだから！」と一緒にお昼ご飯を頂くことになった。昼食を持参していなかった私にお弁当を分けてくれようとしたり、たこ焼きを食べきれないから半分こしようといってくださったり、明るいお母さん方の優しさに触れることができた。現地取材だからこそ体験できる楽しい時間となった。



分けていただいた竹の子ご飯

たわいもない会話の節々で被災の住宅補助の話や地震が起きたときの緊急速報の音に驚いた話題が出ていた。明るいながらも地震当時のことを忘れることはもちろんなく、常に被災によって生じる問題と向き合いながら日々を過ごしているように感じた。

Instagram の運用をはじめとし、広報活動を担当する 関 軒 ^{かんのき} ななえさんが金沢駅まで向かう車に同乗させていただき、お話を伺うことができた。



関軒ななえさん

関軒さんは働く方々について次のように語ってくれた。

「みんなほんとに元気。人懐っこい感じ、私なんか初日から下の名前で呼ばれたの。みんなのために頑張りたいなと思える。」

「お母さんたちも大変だけど悪いことばかりじゃないみたい。金沢に避難してきたことで子供や孫と過ごす時間が増えたり、新しい出会いもあったり。どれくらい経ったら戻るんだろうね、こっちで生活するため何か新しいことも考えているみたいよ。」

大変な中でも新たな環境の中で幸せを見いだしている前向きなお母さん方の姿を知ることができた。

広報活動の一つである、Instagram の反響について伺った。

「報道からの連絡も来だし、ここで出張朝市やってくれませんかという連絡もきた。」

反響はありつつも、SNS 等に不慣れな人がほとんどのため手探り状態であると語ってくれた。

4.2. 祖母

五月三日、祖母宅にて祖母へのインタビューを行った。幼少期から見慣れた家でインタビューを行うのは少し違和感があり緊張した。祖母は取材用に今までの作品の一部を並べてくれていた。そこには輪島朝市の活気が溢れているように感じられた。



祖母宅に並べられた作品

祖母は作品を見ながら、その絵が誰の絵で、その人の年齢、何を売っていたのか、何も見ずとも生き活きと語ってくれた。絵を見るごとにそのモデルの方との会話が思い出されるようで、懐かしそうに、楽しそうに話す祖母の姿が印象的だった。

絵を描きたいという思いを持ちながらも仕事をしていてチャンスがなかった祖母は、仕事が落ち着いた 1999 年頃から絵の教室に通い始めたそう。

「一番最初はその中国へ行った時の建物の絵を書いていたんだけど、町の中で露店をしてる人たちの絵を描いたりもしていた。やっぱり露店っていうのはすごい魅力があるじゃない、なんだかね。それで露店みたいな所を描きたいと思っていたら、朝市がこの辺だと輪島だから 100 キロあるのちょうど。片道一時間半で走れば行けるから、それで通い始めました。」

祖母は市場で働く人々に惹かれ、自宅からも通うことができる輪島朝市に通い始めた。そうして地震が起きるまで 22 年間輪島に通った。なぜそこまで輪島朝市が祖母を惹きつけたのかを聞いてみると次のように話した。

「(通い始めた当時は)おばちゃんたちがみんな私より大体年上だったんだけど、すごく優しいのね。働く人の独特の優しさっていうのはあるの、強いんだけど優しいという。そういうのがすごく好きで通い始めた。最初はね現場で書いていたから、いつの間にか後ろに人がいっぱい見ていて、こりゃだめだなと思って、写真撮ってきて書くようにした。」

働く人が持つ独特の優しさ、強いけど優しい、祖母が輪島朝市で働く方々に感じたその魅力は前日の取材で私も感じる事ができた。商売を続けたいという強い思い、お金を稼ぎ続けるということの重要性を良い意味で忘れることなく、めげずに活動し続ける商

売人としての強さと、人を受け入れ、楽しませ笑顔で話してくれる優しさ、そういった商売人の人々ならではの優しさに私も魅了された。物を買う目的に加えて、お母さんたちに会いに行きたいと思わせるような人としての魅力は輪島朝市を象徴するものの一つであるのだろう。

「楽しいのよ朝市描いていて。絵を描くには輪島に行かなきゃいけないでしょ。それがまたすごい楽しいの。1時間半自分で運転していく時もね、すごく楽しいのよなんだか。能登半島というか、石川県全体がそうなんだけど植物がすごく豊かなのね。」

祖母は植物が好きで庭にも多くの草木花が植わっている。季節ごとに姿を変える植物が道のりに見えるというのも楽しみの一つだったそう。能登の自然も一つ祖母を輪島朝市に惹きつけたようだった。

そんな祖母は、地震により形を大きく変えた出張輪島朝市に参加して感じたことを次のように語った。

「あれ(出張朝市)はしょうがないんでしょうけどね。やっぱり、絵描こうかなっていう気にはならない。人が多すぎて。」

「朝市のいいところっていうのはね、おばあちゃんと話しながら物を買ったり、体の調子を聞いたり色んなことをお互いに話したりするんだけど、出張朝市はもう、次から次から人が押し寄せてね、朝市の雰囲気は全然ないわね。今は書きたいと思うような感じではなくなっちゃった。」

祖母は、会話の中で好きだと思える方をモデルにし、写真を撮りやすいし長居しても邪魔になりにくいという理由で持ち店やテントを張らずに地べたに物を広げている形式で出店している方をモデルにすることが多かった。そのため、出張輪島朝市の形式は全く別物と言える。

「また時間が経ったら描きたいかな。とにかく働く人の絵は描きたいから。それに、出張朝市に来ている人はみんな若いのね。90歳になってもまだ自分で畑をやって、そこで作ったものを売ってっていう。そういう、そのおばちゃんたちが好きだったわけ。優しいのよそのおばちゃんたちが。もうおばちゃんじゃなくなって、こっちがおばちゃんになっちゃったけどね。」

自然に惹かれ、輪島朝市の方々の生きるパワーと人柄に惹かれ輪島朝市に通うことを決めた祖母にとって、人に溢れる出張開催はまた別のものであり、朝市だから描く、誰だから描くということだけではない祖母の輪島朝市に対する思いを知った。

そして、祖母の目指す先を聞いたときに、輪島朝市の絵を描き続ける理由を会話の中で見いだすことができた。

「目標はそうね、一生に一枚絵が残ればいいと思う。こんな絵描く人がいたんだっていうのが一生に一枚描ければいいと思う。」

続けて、輪島朝市の絵について次のように語ってくれた。

「それにね朝市に行ってて、おばちゃんたちにすごく助けてもらったしね。もう一つはねおばちゃんたちが生きてた証があればいいな、証が何か残ればいいなと思って描いている。こんな人が昔いたんだっていうのならないかな。」

「都さんなんていうのも地べたに物を置いて売ってるから、朝市組合の役員でもないし、きっとどこにも名前を残らないと思うの。そういう人がほとんどモデルさんなんだけど、昔こんな人があそこで野菜、魚を売ってたなっていうのが残ればすごくいいと思う。」

「昔こういうおばあちゃんがいて、一人一人それぞれどういう個性があってどういう性格で、どういう生活をしてたっていう記録になるような絵本とかを自分で作ろうともは思っている。それがおばあちゃんたちにとって嬉しいかどうかかわからないけど、一応絵を描いたら写真にしてあのおばあちゃんたちには渡してる。息子さんや娘さんが、おばあちゃんの絵だから欲しいって言って買ってくださる人もいるけどね。昔こんなおばあちゃんたちがいたんだっていうのがどっかに残ればいいと思う。」

そう語る祖母を見て、すごく誇らしい気持ちになった。幼い頃から祖母の絵が身近にあり、私の似顔絵を描いてくれたこともあった。当たり前のことのように感じてしまっていたが、改めて祖母が行っている活動の影響と記録的な意義を感じた。それに加え、祖母が人々の生きた証を残すべく活動しているという点に尊敬の念を抱いた。

そんな祖母が地震以降に描いた新しい作品は、今までの人物中心の作品ではなく輪島朝市の風景の絵であった。地震前最後に祖母が輪島朝市を訪れた 2023 年 11 月 26 日の風景である。

「今まではああいう絵(風景画)は他の人も描いてるし、あんまり描かなかったの。でもこんな風景がもう見られないから描いておいたの。新しく作ったらまた違うだろうからね。あれだけ燃えてしまったらね。」

もう見ることのできなくなった輪島朝市の景色を祖母なりの方法で残していた。



祖母と、輪島朝市の風景画

4.3. 出張輪島朝市@金石

2024年5月4日、祖母と共に出張朝市が開催される金石港に向かった。多くの人で賑わう金石港は前々日の取材時とは全く違う様子であった。オレンジのテントが並び、子供からお年寄りまで幅広い層の客が見受けられた。干物を焼いて食べることができる飲食スペースが設置され、地元の団体によるパフォーマンスが行われるなど、会場には笑顔が溢れる大いに盛り上がっていた。



賑わう金石会場

輪島朝市への応援メッセージを書くボードが設置されていたり、川の対岸にある、かないわ病院には「つなぐ笑顔」というメッセージが会場から見える位置に掲げられていたり、出張輪島朝市の人々、金石の人々、来場者全てが一体となり輪島朝市を盛り上げようとしている、そんな熱気を感じた。



金石港の向かい、かないわ病院に掲げられた応援メッセージ

祖母と共に場内を歩いていると、絵のモデルの一人である浜谷順子さんと会うことができた。地震後はじめての再会だった。祖母は浜谷さんに駆け寄り、笑顔で手を握り言葉を交わしていた。

かなりの混雑の中でそれほど長い時間話すことはできなかったが、私も浜谷さんに挨拶をすることができた。



再会を果たした祖母と浜谷順子さん

祖母は、わらざうりや民芸品を扱う小西さんとの再会も果たした。朝市通りに「小西堂」というお店を構え、居住していたという小西さんは現在仮設住宅に住んでいるそうだ。家族皆さんがご無事だと聞き、祖母も安堵の表情を浮かべていた。



小西元子さんと祖母、再開の瞬間

小西さんは祖母に次のように話した。

「あんた輪島には行ってこられた？すごいんやわ。私は昨日と一昨日に行ったけど、みんなぺちゃんこぺちゃんこ。でも私も自分の家がありますから、また出たいと、戻りたいと思います。」

常に前向きな言葉で祖母と会話をしていた小西さん。手を握りながら「また来てくださいね」、「また来るね」と交わす二人の姿に、輪島朝市の灯火を絶やさずに続けていくことで守られる人々の繋がりがあることを実感した。

久々の再会もあり、祖母の顔には笑顔が浮かんでいた。浜谷さん、小西さん共に、数ヶ月の月日が流れても、連絡手段等がなくともお互いを覚えていて互いを心配する姿が印象的であった。祖母が輪島朝市に通い続けていた理由である、人々との繋がり、お母さん方の暖かさを再確認した。

祖母に感想を聞いた。

「懐かしい人と３人お会いできて良かったです。でも絵にするのは難しい、人が多すぎる。」

祖母は記録用のデジタルカメラで数枚写真を撮り、「良いのがあれば拾って絵に出来るかもしれないけど、こんな(混雑した)状態じゃね、」とこぼした。

インタビューを通してじっくりと祖母の考えを聞くことができた。頻繁には会うことのできない祖母と私にとって忘れられない思い出ができた。

そして取材を終え帰宅した翌日、祖母から父宛にメールが届いた。

「今朝 7 時まで寝ました。快調 庭花盛り 凄くいい香り、また絵を描く力が出てきまし

た。昨日の取材のおかげ 莉音さんに伝えてください。浜谷順子さんの店描く予定です。元気を有り難う。」

祖母が「働く人々の生きた証を残したい」という思いで絵を描いていると聞いたとき、私の取材もその意義を担う一手になること、そして祖母の生きた証をも残すことができることを自覚した。私は祖母から話を聞くことしかしていなかったが、それが祖母のモチベーションに繋がったとわかり嬉しくなった。

4.4.祖母の絵のモデルとなった方々を調査

絵のモデルとなった方々へのインタビューを実施すべく、絵と名前の情報を一致させる作業、モデルの方への連絡手段の調達が必要となった。

2024 年 8 月中旬、祖母の協力を得て、名前と絵が一致した以下の方々に対象を絞った。



浜谷順子さん(5 月 4 日出張輪島朝市にて再会済み)



古江文子さん



表さとえさん



宮下きよいさん



富水和美さん



瀬戸みわ子さん

坂下敏子さん

狭間キヨ子さん

連絡手段を入手するべく、まず輪島市の企画推進部に問い合わせた。その後、輪島朝市の公式ホームページ、お問い合わせページから連絡を行った。

輪島朝市の担当者の方から返信を頂き、以下の状況であると分かった。

浜谷順子さん…現役で活動中。ワイプラザ輪島店(大型スーパーマーケット)にて出張朝市として出店。

古江文子さん…農家の方。現在連絡が取れない

表さとえさん…消息不明

宮下きよいさん…消息不明

富水和美さん…活動はしていないが、連絡可能

瀬戸みわ子さん…農家の方。現在連絡が取れない

坂下敏子さん…現在輪島朝市に属していない

狭間キヨ子さん…入院中

取材実施の実現性を考え、浜谷順子さん、富水和美さんに取材をお願いしたいと思い、五月の取材にお世話になった関軒さんと再度メールのやりとりを行った。

関軒さんを仲介したやりとりとなり、取材の可否の確認、日程調整に時間を要してしま

った。そして、2024 年 9 月 21 日、能登半島では記録的な豪雨が発生し、再び連絡が途切れてしまった。10 月中旬、再び連絡が取れるようになると、その時点で冨水さんは豪雨の被害に遭われ取材ができない状態であることが分かった。

そこで第 2 回取材として浜谷さんへの取材を計画することとした。

4.5. 祖母の新しい作品鑑賞

2024 年 9 月 29 日、上野にて開催される「第八十五回記念 一水会展」に足を運んだ。祖母は毎秋の公募展に作品を出している。

今回の祖母の作品は、過去の作品を並べた様子を俯瞰して見た絵であった。作品の題名は「画室の中の朝市」である。



一水会展にて展示された祖母の作品

作品には、今は見ることでできなくなった朝市の活気を感じた。味を感じる絵の中のお母さんたちの顔を見ていると、人々の行き交う声がザワザワと聞こえてくるような感覚がした。その一方で、重なり合う絵の様子にその活気はただ絵の中にしか残っていないという現実も感じさせられた。四角のキャンバス中に残っている活気は、今となっては絵にしか残っていない、そんなもの悲しさが心に残った。

作品を描いた思いについて、祖母からメールで回答を得た。

「しばらくは輪島に行けないのと、モデルさんたちは皆お年なのでこれらの絵のような

情景は見られないだろうから残しておきたいと思って描きました。手元に 200 枚以上ある輪島のおばさんたちの絵を何かの形で残しておきたかったのです。」

通い詰めた輪島朝市の情景の記憶、そして祖母自身の今までの作品の記録、祖母の思いと残したい 2 つの記憶を表した作品であった。絵を描いて祖母だからこそ描くことができ、残すことができる作品だと感じた。

4.5. 祖母のモデル(浜谷順子さん)

2024 年 11 月、祖母に連絡をすると直近で描いた絵の画像を送ってくれた。5 月 4 日に訪れた出張輪島朝市での浜谷順子さんを描いた絵だった。実際に私が足運んでから数ヶ月が経っていたが、祖母の絵を見て一瞬で絵のモデルとなった場面を鮮明に思い出した。今にも絵が動き出しそうにも思えた。

今までは自分の見たことのない様子を描いた作品を見て思いを馳せることしかできなかったが、祖母の絵がいかにリアルを切り取った作品であるかを思い知らされた。祖母が「証を残したい。」という働く人々の姿は、絵によってこれほど鮮明に残されるのか、と衝撃を受けた。改めて祖母の活動の意義を感じた。



祖母が描いた絵(左)とその絵のモデルとなった場面(右)

2024 年 11 月 16 日、浜谷さんを訪ねるべく輪島市に向かった。

金沢から車に乗り、「のと里山海道」を走った。道中では、曲がった道、陥没した地面、大きく段差のできた箇所もあれば、地面が裂け部分的に閉鎖されている場所もあり、崖崩れしたと思われる景色も見られた。地震が起きてから 11 ヶ月経った今もなおその爪痕は大きく残っていた。その事実を、輪島への道中、実感させられた。現地も復興が完璧になされていないことは分かっていたつもりではあった。しかし、出張朝市の明るい人々、復興へ向かっていることを報道する日々のニュースから、私自身が、被害の大きさ

を少しずつ無かったことにしようとしていたのかもしれない。輪島市内に近づくにつれ、地震により倒壊した建物が多く見られた。、ショベルカーなどの重機があちこちで作業を行っていた。撤去作業もまだまだ進行途中であった。

ワイプラザ輪島では出張輪島朝市のスペースが大々的に設置されていた。



ワイプラザ輪島店、出張輪島朝市のブース

食品を扱う店から、民芸品を扱う店まで十数店舗のテントが並んでいた。浜谷さんのテントでは干物を扱っていた。被災前は、漁師である旦那さんと息子さんが底引き網漁の船で取ってきた鮮魚も扱っていたという。

輪島では2024年11月8日、ズワイガニが初水揚げされ、約10ヶ月ぶりに本格的な漁が再開された。浜谷さん家族も輪島港から漁に出ているそうだが、漁の仕方等に変化があり、作業はできるが氷を作る機能が未だに復旧していないなど完全体ではないとのことだった。

浜谷さんに祖母の絵を印刷したはがきを渡すと、「わあ、確かに私やわ」と笑顔で受け取ってくだった。漁に出ている家族の都合もあり、長くお話を聞くことはできない状況であったため、お聞きしたい質問事項をまとめて記載した手紙をお渡しし、電話もしくは郵送で後日回答を頂くことになった。お店で人気だという「干したこ」を購入し、浜谷さんと別れた。



浜谷順子さんと売り場

4. 7. 被災後の輪島

朝市通りに向かうと一面何もなくなった景色が広がっていた。建物はほとんど残っていない。2、3 個のコンクリートの建物だけがぼつんと残っていた。



焼け野原になった朝市通り

私は輪島朝市通りに来たのは初めてであったが、祖母の絵があったおかげで朝市の活気を思い浮かべることはできていた。目の前に広がる景色に祖母の絵の面影は全くなかった。何もなくなった一面を見て現実の景色として受け入れるのは容易ではなかったが、祖母の絵に残る人々の生活や日常が本当に奪われてしまったんだと改めて思い知らされた。

朝市通りの数十メートルは建物が残っており、立ち入り禁止の看板のギリギリまで近づくことができた。祖母が描いた絵と同じ地面の石畳の通りには、倒壊した建物のがれき

と、斜めに崩れた建物があつた。倒れずに残っている建物全てに、解体予定の旨が記された紙や看板が貼られていた。その複数の建物を通り過ぎ先に進むと、取り壊しとがれきの撤去も済んだ、何もない景色が広がっていた。

テントに並ぶ商品や働く方々と客との会話、祖母の絵に残るような賑やかな朝市の光景が確かにあった場所が、物理的に全て無くなっている、その事実には感じることのない喪失感を覚えた。また、輪島に戻って朝市がしたいと語ってくれた方々の思いがかなう日が来るには、まだまだ時間がかかるという現実を認識するとともに、そう話してくれた方々の強さを再確認した。



祖母が描いた朝市通りの風景と現在の朝市通りの様子

4. 8. 浜谷順子さんからの手紙

2024 年 12 月中旬、ワイプラザにて浜谷順子さんに渡した手紙の返事が返ってきました。忙しい中、手紙を返してくださった浜谷さんの優しさに感謝の気持ちが溢れた。

以下、質問事項に対する浜谷さんの回答(原文)

質問 1: 輪島朝市のどのような点に魅力を感じ働かれていましたか？

回答 1: 人とのふれあいかな！

質問 2: 祖母(山口順子)の絵について、どのように感じますか？

回答 2: 人情味があると思う！

質問 3: 2024 年 1 月 1 日、地震が起きた時はどうしていましたか？

回答 3: ワイプラザで買い物していた！

質問 4:地震、火災が起こり、どう思いましたか？

回答 4:ショック！

質問 5:被災後の生活を教えてください。

回答 5:いろいろあって！

質問 6:出張朝市についてどのように感じていますか？

回答 6:ありがたく思っています！

質問 7:被災前と現在を比べて変わったこと、変わらずに続いていることは何ですか？

回答 7:人間関係

質問 8:浜谷さんにとっての輪島朝市に対する思いを教えてください。

回答 8:生きがい！

質問 9:今後の輪島朝市がどうなってほしいですか？

回答 9:みんな仲良く仕事ができるように！

質問 10:浜谷さん自身の目標はありますか？

回答 10:できればあと 10 年は出来ますように！

質問 11:祖母の絵が「輪島朝市の記憶」を残していると思いますか？

回答 11:そうあってほしい！

4.9. 被災から1年が経過

2025 年 1 月。祖母から毎年恒例の自作カレンダーが届いた。そこには変わらず輪島朝市の様子が描かれていた。タイトルは「画室の中の朝市」。9月の展示で見た作品と同様に過去の作品を並べた様子の絵である。荷物に同封されていた祖母からの手紙には次のように書かれていた。

「今年はそろそろ輪島にも通うことに致します。モデルのおばさんたちに会いにゆきます。もう朝市の今までのような風景はのぞめにかもかもしれませんが、出来る限り描いていき

たいと思います。」

絵を描くことをきっかけに出来た繋がりは絶たれることなく、今後も続いていく。輪島朝市が開催の形式や場所を変えながらも続いていくなかで、変わらない人々の温かさや繋がりを感じながら祖母はこれからも“輪島朝市”で働く人々を描きとめていくのだろう。変わるものと変わらないもの。その狭間で、輪島朝市はこれからも誰かにとっての生きがいとなり、人々をつなぐ存在であり続けて欲しいと思う。

祖母のカレンダーを眺めながら、来年のカレンダーにはどんな輪島朝市の姿が見られるのかを想像した。そこにはきっと、新しい風景の中でも変わらぬ人の温かさが描かれているのではないかと思う。

私自身、この取材を通じて感じた輪島朝市の温かさや、人々の強さを忘れずにこれからも心に留めておきたい。そして、祖母が絵を描き続けるように、私もまた、自分なりの方法で輪島朝市、祖母の絵の存在と込められた思いを伝えていきたい。

5. まとめ

本研究は、被災から復興へ向かう輪島朝市関係者の体験と想いを明らかにすること、そして祖母の絵のモデルとなった方々がどのように被災を経験し、どのような原動力を持って前へ進んでいるのかを探ることを目的としていた。また、被災地から遠く離れた場所に暮らす私自身の視点を大切にしながら、輪島朝市が持つ記憶や人々のつながりを記録し、伝えることを目指した。

祖母の絵がきっかけとなり、被災後の輪島朝市の現状や、そこで働く人々、祖母の想いに触れることができたことは、私にとってかけがえのない経験となった。

私自身、初めての取材であったことも相まって簡単に研究を進めることができたわけではなかった。研究を進める中で、当初想定していなかった困難にも直面した。特に、2024年9月の豪雨によるさらなる被害で取材の計画が変更を余儀なくされ、復興が一筋縄ではいかない現実を目の当たりにした。また、出張輪島朝市の関係者への取材では、皆さんが復興に向けた活動の最中であり、仕事の邪魔にならないよう慎重に配慮する必要があった。

しかし、困難がある一方で、多くの貴重な出会いがあった。

金石港、加工場にて行った取材では、明るく和気藹々と働くお母さん方の姿に触れ、被災の苦しみを乗り越えることは容易ではない中で“仲間”や人の繋がりで自分たちを鼓舞している人々の力強さを感じた。出張朝市という新しい形で輪島朝市の灯を消さぬよう活動をされている皆さんの「人とのふれあいが何より大事」「朝市は生きがい」と語る言葉が印象的であり、朝市が単なる商売の場ではなく、人と人とがつかないでいる場所であることを実感した。

また、今回のインタビューで初めて、祖母が「働く人の姿を描くこと」にこだわる理由や、絵を通じて「生きた証を残したい」と考えていたことを知ることができた。祖母が描いた作品は、ただの芸術作品ではなく、輪島朝市の活気や、働く人の温かさが込められた「記録」でもあることを強く実感した。絵に込められた思いがある限り、過去の出来事を風化させることなく伝え続ける力を持っている。

地震の発生から11ヶ月が経った輪島を訪れ、実際に朝市通りの現状を目にした際にはその変わり果てた姿に言葉を失った。祖母の絵の中で見てきた活気ある風景はなく、一面の焼け野原が広がっていた。私にとって、被災地を訪れるのは初めての経験で、現実の景色であることさえ疑いたくなるほどの景色を目にした。自分事として災害や被災を考えることは容易ではないが、けして軽視したり慣れたりするべきでないと強く感じた。

研究を進めていく中で、輪島朝市は単なる市場ではなく、人々の人生やつながりが交差する場所であると気がついた。輪島の風景、輪島朝市は大きく変わってしまったが、それを支えている人々の想いは今も変わっていない。

そして、祖母の絵がそうであるように、私自身の取材もまた、輪島朝市の「記憶」を未来に伝えるひとつの手段になりうるのではないかと感じている。

【参考文献】

・出張輪島朝市,【公式】出張輪島朝市,<https://s-wajima-asaichi.com/>,(参照 2024-11-15)

・輪島市朝市組合,輪島朝市【公式】輪島市朝市組合,<https://asaichi.info/>,(参照

2024-11)

・NHK, “輪島港でズワイガニ初水揚げ 本格的な漁の再開は約 10 か月ぶり”、NHK NEWS WEB、2024-11-8,

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20241108/k10014633251000.html>, (参照 2024-11-15)